宝鏡寺人形展五十周年記念 人形公募作品展

ART 開催中

やんごとなき門跡にて、物言わぬ人形と語り合う秋。

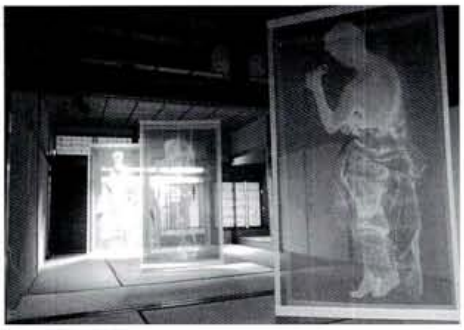
掘川通寺之内。静かな界隈に佇む宝鏡寺は、門跡、つまり皇室ゆかりのお寺で、中世にさかえた尼五山のひとつ。歴代の皇女が住持し、孝明天皇が愛した人形や、御所文化の雅を伝えるおもちゃなどが残っている。毎年春と秋に、それら皇室ゆかりの人形を特別公開しているため、いつしか「人形寺」として親しまれるようになった。

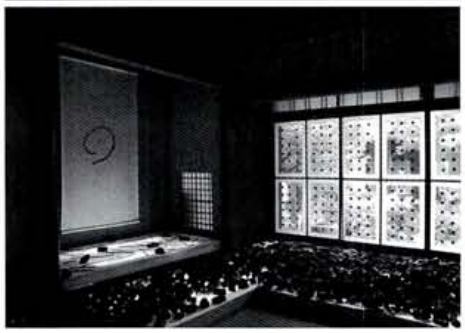
その人形展が今回で50周年を迎えるのを記念して、創作人形の公募展が開催される。応募1000点から選ばれた300点の入選作と一緒に、与勇輝、川本喜八郎、面屋庄甫、森小夜子ら、日本を代表する人形作家たちの作品の展示もある。

心がざわめくエロチックな関節球体人形がブームですが、しっとりした黒髪の人形も、いくつになっても心惹かれるものがある。静かな秋にふさわしいお寺イベントだ。

（沢田眉香子）

■「宝鏡寺人形展五十周年記念　人形公募作品展」
■ 宝鏡寺門跡
■ ～2007.12.24（Mon）
■ 一般1000円
■ 問い合わせ　075・451・1550





BIWAKOビエンナーレ2007 ［風土］-Genius Loci-

ART 開催中

アート＝ややこしい、そう思ってる人ほど、観光がてらにでも覗いてみてくださいな。

近江八幡駅前にあるカネ吉のコロッケ（世界イチ美味いと思ってます）をおやつに育った、近江八幡育ち…と毎回、自己紹介みたいになるのでこの辺で止めておきます。

で、BIWAKOビエンナーレ2007です。景観保存地区でもある近江八幡の旧市街地周辺の建物や自然を会場として、国内外のアーティストがリアルタイムで作品をつくり上げていくインスタレーションや、訪れるギャラリーや地元民を巻き込んでアートをつくり上げていくという試み。

面白いのはともすれば空間から切り取られたように浮いてしまい、地元民からすれば、「なんやけったいなことやってんなぁ～」となるところを、きっちり町の人たちを巻き込んで、町に根付いたアートへ導こうとしているところ。会期もたっぷり1カ月以上。美術館の展覧会とは違う、肌で感じられるアートの世界へ、ぜひ。

（坂東寛士／本誌）

■「BIWAKOビエンナーレ2007 ［風土］-Genius Loci-」
■～2007.11.18.(Sun)
■近江八幡旧市街地周辺（近江八幡市立かわらミュージアム、旧伊家、カネ吉別邸、八幡堀など会場多数）
■問い合わせ先　0748・26・4398（BIWAKOビエンナーレ事務局）http://www.energyfield.org/

Kyoto Car-Moratorium
～京都人のクルマ知らず～

7th Lap to go

中島 崇（なかじまたかし）

'68年生。自称「車選びのソムリエ」。創業昭和38年、北区は紫野の自動車屋・(株)中島商会の二代目社長にして「安くていい車」を探すスペシャリスト。かつて自動車オークションの取引で2000万円をドブに捨て、大失敗の連続から学んだノウハウをまとめた無料小冊子「その車に手を出すな！」も好評。中島流「車道家元」を目指す京都人。

京都人は、ウラオモテがあると言いますが…。

ポルシェを購入して時速300キロで安定高速走行を堪能し、「いい買い物をした」と思う人は多分少ない。「いい買い物をした」と思う本当の瞬間とは、信号待ちでチラ見される瞬間だったりするのである。

自動車雑誌の表紙にビキニ姿の女性を掲載すると売上が上がるそうである。つまり、「こんな車に乗っているとモテるだろうなぁ」という裏の欲望があるということだ。

近年発売されている新車は、ワゴンとスポーツカーを融合させたスポーツワゴン。4ドア5速ミッションのスポーツセダン等、一石二鳥型の新車が多い。これは裏欲と表欲の妥協の産物とも言える。言ってみれば無個性の象徴で、だから車に心底惚れることがない。だからいっそ、裏の欲望で車を乗り換えるのも面白いと思うのだ。複数所有が難しければ、着せ替え感覚で中古車を乗り換えればいい。昔欲しかった車。その車がなぜ欲しかったのか、その裏欲を思い出して、そのまま突っ走るのも楽しいものである。

「これからは家族を大切にするよ」と旦那が罪滅ぼし宣言の「ポルボ・ステーションワゴン」。京都の「染技」を守りたいと修行中の彼は「お茶目なところを見せたい」から「ローバーMINI」。一度もフェラーリに乗ったことがないのに「もうロッソコルサ（真紅のフェラーリ）には乗り飽きた」とエンスー気取りの「ブルーのフェラーリ」…。

京都人にはウラオモテがあるとよく言われるが、車を見れば、実は一番ひととなりが解るのかも…。